

平成27年度「日本現代文学」における授業の工夫 —『となりのトトロ』から『絶歌』まで—

池田 翼*

Devises on Contemporary Japanese Literature Classes at 2015 -From “My Neighbor Totoro” to “Zekka”-

Tsubasa Ikeda*

Abstract: For National Institute of Technology students, the Japanese contemporary literature is the field of difficult to make an interest. Because we gather students interested in science and technology system, it is no wonder, but since I open a course in a subject, I collect their interest and must provide learning to deepen a thought. In this report, I write down result and the reflection point of various devises went in Contemporary Japanese Literature Classes that I opened a course in 2015.

キーワード：日本現代文学, 国語授業

Keywords : Contemporary Japanese Literature, Japanese Classes

1. はじめに

本稿では、平成27年度に開講した「日本現代文学」という授業の中で、理系の学生に「文学」に興味を持ってもらい、学びを深めてもらうために筆者が行った工夫とその成果・反省点について記す。

高専生にとって、日本現代文学は関心の向きにくい分野である。以前行った本学3年生対象のアンケートでは、1週間の読書量が0～30分であるとの回答が半数を超えていたし、授業中に学生に質問してみると、村上春樹は知っているが村上龍は誰も知らない、太宰治は聞いたことがあるが三島由紀夫は聞いたこともない、という反応である。

高専のカリキュラム上国語を含む文系科目が少なく、そもそも理工系に関心がある学生を募っているのも無理もないが、当校が掲げる学習・教育到達目標に沿って「日本現代文学」という科目を開講している以上、彼らの関心を集め、思考を深める学びを提供しなくてはならない。

そのために平成27年度「日本現代文学」では、学生の関心を引きそうなトピックを盛り込みながら、半期の授業を組み立てた。また、この科目は学修単位であるため、学生の自学自習時間を確保するとともに、主体的な学びを促すよう心掛けた。本稿において、具体的にどのような工夫を試みたかを概説しつつ、また、それらは有効だったか・有効ではなかったかを、授業者の感触と学生の反応を根拠にしつつ報告する。

2. 授業の概要

この科目は、5年生全学科対象の前期開講選択必修科目である。科目概要は、「日本現代文学を中心にした作品の読解を通して、文学作品の基本的な「読み」の方法を身に着ける。また、多様な作品の鑑賞を通して、文学的思考の涵養や人間の多様性への理解を目指す。」とし、シラバス上のスケジュールを表1のようにした。受講者は48人だった。

また、当科目は学修単位であり、自学自習を含めて45時間の学習時間を確保し、2単位を認定することになる。そのため、全10回の小レポートを課したうえで、8割以上の提出がなければ単位の認定は不可とし、成績の4割についてはレポートの成果によって評価を行った。

表1 シラバス記載の授業項目

授業項目	
1	文学とは何か
2	戦前の日本文学（1）
3	戦前の日本文学（2）
4	戦前の日本文学（3）
5	戦後～昭和期の日本文学（1）
6	戦後～昭和期の日本文学（2）
7	戦後～昭和期の日本文学（3）
8	〔中間試験〕
9	平成期の日本文学（1）
10	平成期の日本文学（2）
11	平成期の日本文学（3）
12	ゼロ年代以降の日本文学（1）
13	ゼロ年代以降の日本文学（2）
14	ゼロ年代以降の日本文学（3）
15	日本現代文学まとめ
	〔前期末試験〕

* 共通教育科
〒866-8501 八代市平山新町 2627
Dept. of Liberal Studies,
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan

3. 実施内容の報告

3.1 実施内容一覧

シラバスの授業項目ではおおまかな内容しか記していない。これは学生の反応を見ながら、また、授業を実施していく中で世の中の関心事に目を配りながら、それらと取り上げる内容を繋げる余地を残すためである。半期の授業を終え、実際に授業で実施した内容の一覧を表2に示す。

3.2 課題レポートの扱い

前述したように、この科目は学修単位であり、学生に自学自習に取り組ませる必要がある。そのため400字の小レポートを全10課題設定し、提出させた。レポートは授業支援システムであるWebClassを用いて回収し、毎回の課題提出後には、15人～20人のレポートを取り上げて印刷・配布し、授業の冒頭で紹介した。以前は手書きでのレポートを回収し、手作業で電子テキスト化して配布・紹介していたのだが、WebClassを使用することによって大幅に時間と手間を短縮することができた。他の受講生のレポートを読むことで、学生は多様な視点や論点に気付くことができ、また、掲載されて他の学生に紹介されることで多少の緊張感を持ち、おおむね課題にまじめに取り組んでいたように思う。提出の際には、以下のように注意点を示した。

- ・冒頭の一文に全体の結論を簡潔に記す。
- ・引用部分は「」で括り、明確にする。
- ・常体（だ・である調）で記述する。
- ・字数（400字程度）を厳守する。

これは数回のレポートを提出させた後に示したものが、回数を重ねるごとに、論述の基本として徐々に定着していった。一つ目の「冒頭に結論」というポイントについては、筆者は他の授業においても度々指導してきたが、この授業では何度も同じスタイルで論述する経験をさせることができたため、最も効果的に身に着けさせることができたと感じている。

3.3 導入Ⅰ「文学」とは何か

ここではまず、日本現代文学について学び始める前提として、「文学」という語の定義について考えた。図1に示したプリントを配布し、学生に主体的に考えてもらうため、「文学」の辞書的定義を確認したのちに、その定義への「ツッコミ」を考えさせた。それぞれが何となく考えている「文学」というものと、辞書による定義に齟齬がないかどうかの確認である。この作業によって、「文学」というような曖昧な観念について、自ら考え定義することの必要性を体験してもらう。5分間で個人の考えを記述し、5分間で近くのメンバーと意見交換をするという作業である。

作業を通して、学生達からは「言語を媒材にしていない表現は文学ではないのか」「想像力ではなく、実際の出来事をもとにしたノンフィクションや伝記は文学ではないのか」「芸術的でなければ文学ではないのか」などの意見が上がり、少なくとも辞書の定義通りで十分だと考えた学生はいなかったようである。この作業を通して「文学」という概念がいかに曖昧で定義しにくいものなのかを確認することができた。

表2 実施した授業項目

授業項目	
1	導入Ⅰ 「文学」とは何か（概説）
2	導入Ⅰ 「文学」とは何か（作家の言葉に耳を傾ける）
3	導入Ⅱ 「解釈」とは何か（トトロ＝死神論争をめぐる）
4	導入Ⅱ 「解釈」とは何か（となりのトトロ解釈例紹介、まとめ）
5	導入Ⅲ 「作者・読者」とは何か（俳句・小説の冒頭文の読みを通して）太宰治Ⅰ （『待つ』講読）
6	太宰治Ⅰ （太宰治概説、『走れメロス』講読、「メロスの全力を検証」紹介）
7	太宰治Ⅱ （『走れメロス』まとめ）
8	前期中間試験
9	試験返却、映画『人間失格』前半鑑賞
10	三島由紀夫Ⅰ （三島由紀夫概説、演説映像鑑賞、三島は太宰嫌い？、『煙草』講読）
11	三島由紀夫Ⅱ （『憂国』盗作事件紹介、「声に出して読みたい三島」講読、インタビュー映像鑑賞、三島のセクシュアリティについて、『海と夕焼け』講読）
12	村上春樹Ⅰ （村上春樹概説、エルサレム賞受賞スピーチ講読、『かえるくん東京を救う』講読）
13	村上春樹Ⅱ （『鏡』講読、私の「怖い話」紹介、村上春樹の現実&非現実について解説）
14	授業のまとめ （皆さんの「不思議な話」紹介、『絶歌』出版騒動概説）
15	映画『人間失格』後半鑑賞
	前期末試験

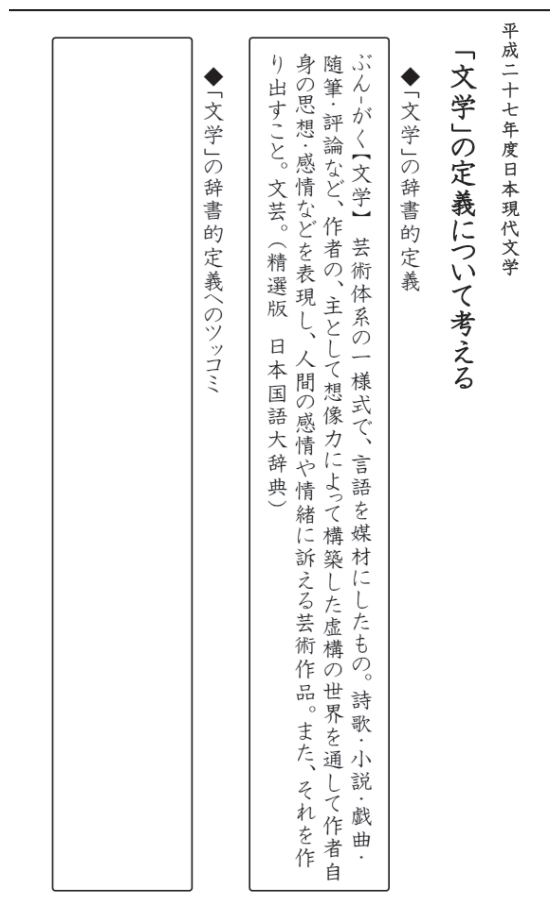


図1 「文学」とは何か 使用プリントの一例

次に、大橋洋一『新文学入門 T・イーグルトン『文学とは何か』を読む』⁽¹⁾の一部を配布し、特に次の引用部に傍線を引かせ、作業を通して体感した「曖昧さ」が指摘されていることを示した。

現在、「文学」と呼ばれているものは、ここまでが文学で、ここから先が文学ではないという厳密な境界によって、守られているわけではないのです。

そのような境界がないために、いろいろな時代に、いろいろな社会で、さまざまなものが文学として認定されたり、認定されなかったりするという状況が起こります。文学の本質とみなされているものは、歴史的变化、社会的変化をうける。ならば、それは、文学の本質ではないということになる。文学は客観的な対象として存在しているのではない。

ここまで確認したうえで、文学作品の実作者である小説家たちは「文学」をどのようにとらえているのかに目を向けた。現代を代表する小説家として、村上龍・村上春樹・高橋源一郎、それに合わせて授業で最初に取り上げる予定の太宰治の4名による言説を紹介した。それぞれ小説作品そのものではなく、エッセイやルポタージュなど、作家の

肉声に近いものから言説を抽出するようにした。例えば村上龍による「文学」の定義としては、エッセイ集『櫻の木の下には瓦礫が埋まっている。』⁽²⁾より以下の引用を含む箇所を取り上げた。

小説というのは、基本的にマイノリティを代弁するものだ。社会に受け入れられない人々の声にならない声を翻訳して、人間の精神の自由と社会の公正さを訴える、それが文学である。

実作者4氏によるそれぞれの「文学」の定義を確認したことを受けて、改めて「文学とは何か」ということについて考えて論述するというレポート課題を与え、導入Ⅰを締めくくった。以下に、提出されたレポートの一部を抜粋する。

- ・自分が考える文学とは、伝える手段である。作者が読者に対して、伝えたいことがあってそれを伝える手段として文学を選んだと考えた。
- ・私にとっての文学とは、自分の内に広がる世界を文字を使って表現するものだと思います。
- ・今回読んだ、4人の小説家の考え方に共通しているのは、「世間一般では弱いとされる立場の人の思いや考えを拾い上げる」というものであると考えた。

このように見てみると、「文学」という曖昧な概念に対し、先行資料や様々な言説にふれることで、自分なりに言語化を試みて思考を固めて行くという作業ができたように思う。少なくともレポートを提出した学生の文章を読む限り、自ら考えることを通して問題と格闘しようとする姿勢は見られた。

3.4 導入Ⅱ「解釈」とは何か

文学作品を講読していくにあたって、次に「解釈」ということについて考えた。ここでは、学生にとってなじみが深いであろう宮崎駿監督・スタジオジブリ制作の長編アニメーション映画『となりのトトロ』に関する話題を提供した。この映画は1988年の公開であるが、子どもを中心に人気が根強く、受講者のうち一人を除いて全員が、全編を通して視聴した経験を持つと答えた。まず受講者に『となりのトトロ』のあらすじを思いだしてもらい、映画に対して持っている印象などを数人で意見交換させた。そのあと、「〈トトロ＝死神〉論争」について説明した。これは都市伝説の一種で、作品の後半にサツキとメイの影が描写されていないことなどいくつかの根拠をもとに、トトロ＝死神であり、二人の姉妹はすでに死亡しているという解釈である。2000年以降ネットを中心に広まった説で、スタジオジブリが公式に否定のコメントを出すなどして話題になった。その端緒は、『宮崎駿を読む 母性とカオスのファンタジー』⁽³⁾であるとも言われており、実際そこではサツキとメイの母親は既に死亡しており、二人の姉妹も死んでいるという解釈が成り立つことが示されている。ここまでの

説明を終えると、学生にはこの論争に対する「ツッコミ」を考えさせた。3.3と同様に、プリントに自分の「ツッコミ」を記述させ、数人で意見交換をさせた。さすがにアニメの話題だけあって活発に意見を交わしていたようである。様子を見てみると、「あんなにかわいいトトロが子どもを死なせる訳がない」「トトロが死神なんて夢が壊されたようで嫌だ」「ジブリがそう言っているから死神ではないしサツキもメイも死んでいない」「トトロ＝死神と考えた方が確かにおもしろい」など、考えはそれぞれようである。

ここまで整理したうえで、図2のようなプリントを使って「解釈とは何か」という本題に入った。

ここで筆者は下記の三つの問題点を提示した。

①ネット上の解釈者の態度

都市伝説の根拠となっているものに、作品上の事実と反するものがある。その根拠に因った解釈に正当性はないのではないか。

②解釈の受容者の態度

そうあって欲しいと願う解釈が示されたとき、その正当性を検証せずに受容してしまう態度には問題があるのではないか。

③スタジオジブリの態度

作者として、その作品の解釈を限定することはできないのではないか。そのような権力が作者にもたらされると考えるならば、解釈の可能性は閉じられてしまわないか。

以上を説明したうえで、トトロに恐ろしさがあるとすればどのように解釈できるのか、上記の3点に反しない範囲での考察を、実際に映画のシーンを参照しながら解説した。学生は特に③には気づきにくいようである。それを誰もが良く知るアニメ映画を例にして解説することで、身近な話題として理解してもらうことができたのではないかと、以下に、この項目を終えてのレポートの一例を示す。

・「トトロは死神である」この解釈に私は不快な気持ちを覚えました。小さい頃から何十回観ても飽きることはなく、今に至るまで大好きなとなりのトトロがそのように捉えられてしまうことが悲しく、この解釈が認められる訳がないと思いました。しかし、授業を通して、私自身が無意識の内に作品の捉え方の幅を狭めていたのだと知りました。解釈はどれだけ広がってもそこに終わりのラインがある訳ではなく、広がった議論の中からまた新たな解釈が生まれることも間違ったことではないのだと学びました。そう考えると、何十年も前に書かれた文学を中心に、現在でも様々な議論や推察が行われているのは、一つの作品が無限定の可能性を持って広がりつつあることを示しているのだと思います。解釈の幅を限定する権限が作者にないとして、根拠のない噂を解釈に見たてて一人歩きさせることがないようにすることも、私たち受容者が担う一つの重要な役割になるのだと思います。

平成二十七年日本現代文学

「解釈」とは何か？『となりのトトロ』をめぐる②

◆トトロと死神論争について

- ① ネット上の解釈者の態度
 - …作品上の事実と離反した解釈の根拠に正当性はない（もはや別バージョン（改作済み）の『となりのトトロ』であればよい）
- ② その解釈の受容者の態度
 - …大衆の欲望を満たす読みに、正当性があるか検証していない（文学の解釈に留まらず、従軍慰安婦問題、原発問題など）
 - …検証が難しく、かつイデオロギッシュな思想が絡む話題にもあてはまる（スタジオジブリの態度）
- ③ スタジオジブリの態度
 - …作品の解釈を制作者として限定する権力はない（制作者の「タネ明かし」も一受容者の解釈ではない）

解釈は作品を受容者にとって都合よく捻じ曲げる

制作者によって受容のあり方を限定される

作品が持つ射程の中で、どこまで読みを広げられるか

文学研究者は、テストパイロットである（石原千秋）

作品

▲解釈の図式モデル

◆それでもトトロは怖い

トトロの怖さ
 ・正体不明性と混在性（シーン①参照）
 ・近接性
 ・暴力性（シーン②、シーン③参照）

トトロへ自然（「死」を含む）という理不尽で暴力的、かつ人為を超えた力が隣在している（「となり」に在る）ことを示す

子どもにしか見えないトトロ：子どもは右記の（自然）をそのまま受け入れる
 ↓母親の死や「メイの死」を（自然に起こりうる可能性として）受け入れ、
 恐怖を感じた（自分の力が何にも及ばないと感じた）ときにトトロは現れる
 ↓それが見えなくなることが、大人になるということ

図2 「解釈」とは何か 使用プリントの一例

3.5 導入Ⅲ「作者・読者」とは何か

導入の最後のポイントとして、「作者・読者」について考えた。まず学生に俳句を鑑賞させ、その解釈を自分なりに考えることと、それぞれの句の作者像を想像することを指示した。取り上げたのは、以下の4句である。なお、作業時には作者名は伏せておいた。

- ・行く我にとどまる汝に秋二つ（正岡子規）
- ・じゃんけんで負けて蛭に生まれたの（池田澄子）
- ・たんぽぽのぽぽのあたりが火事です（坪内稔典）
- ・わが恋は空のはてなる白百合か（コンピュータ）

前回までと同様、各自で作業を行ったあと、数人での意見交換をさせ、しばらくしてから作者について解説する。学生達は作者像が想像通りだったり、予想を裏切るものだったりすることに一喜一憂しているが、問題は4句目だ。これは黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢をみたか』⁽⁴⁾で紹介されている、コンピュータ上のプログラムが作成した俳句なのである。ここで「作者・読者」とは何かという論点に目を向けると、常に「読者」は作品の奥に「作者」を想定しており、その「想定された作者」は「現実の作者」とは必ずしも一致しないことが分かる。また、「読者」がいかに行間を読んでいるかということを経験してもらうため、ある小説の冒頭数行を読み、そこに「書いてはいないが分かること」を全て書き出すという作業も実施した。これらの作業を通じて、「読者」というものが受動的な存在ではなく、読書という行為が主体的でアクティブな働きに満ちているのだということを確認した。

3.6 各作家の取り上げ方

今年度の授業では3人の作家を詳細に取り上げ、その作品を講読した。それぞれの作家を取り上げる際、学生に縁遠いものと思われることを避けるため、以下のような工夫をした。

(1) 太宰治

太宰自身の作品を読み始める前に、小説『火花』⁽⁵⁾で注目を集め、お笑い芸人としても人気の高い又吉直樹を取り上げた。又吉は太宰に耽溺した時期があり、著書『第二図書係補佐』⁽⁶⁾の中で『人間失格』の書評を記している。その書評とともに、『火花』についても紹介した。『火花』が第35回芥川賞受賞作に決定したころには授業も終わりに差し掛かっていたが、世間で注目を集めることで学生の印象にも残ったようであった。また、『人間失格』は長編で扱いづらいため、授業時間の一部を使って映画⁽⁷⁾を鑑賞した。太宰の生誕100周年にあわせて2010年に公開されたものだったため、現代においても太宰が影響力を持っていることを印象付けることができた。さらに『走れメロス』を講読する際には、理数教育研究所の「算数・数学の自由研究」で2013年度最優秀賞を獲得した「メロスの全力を検証」を紹介した。これは中学2年生の学生が自由研究の一

環としてメロスの行動過程を時間軸に置き、時速何キロメートルで移動したかを推定したもので、「メロスは走っていない」という結論が得られている。メロスを純粋な感動小説と捉えていた学生にとっては驚きであり、メロスに胡散臭さを感じていた学生にとっては腑に落ちるものである。この研究を紹介し、一度は読んだことがある『走れメロス』を再読することで、別の視点から作品に向き合う面白さを体感してもらおうと考えた。

(2) 三島由紀夫

太宰についての授業をまとめるころに、安保法案に対するデモの動きが大きくなってきた。そこで戦後～昭和期の作家として、政治色の強い三島由紀夫を取り上げた。太宰治を取り上げた授業の最後に、三島による反太宰的な言説を取り上げ、三島が強く太宰を意識していたことを解説し、つなぎとしておいた。次の授業の冒頭で市ヶ谷駐屯地での自決前の演説映像を流し、現代の思想潮流との対比を促すことで、印象付けた。また、三島を取り上げてから2週目には、韓国の作家による『憂国』盗作騒ぎがおきたので、授業で紹介するとともに国際的に三島が評価されていることを強調した。さらに、昨今話題になることの多いLGBTなどの語を含むセクシャル・マイノリティの話題にふれ、三島にもその可能性があったことを示し、時事的な話題とのつながりを持たせた。

(3) 村上春樹

3人目の作家である村上春樹については、話題にことかない。今や日本で一番有名な純文学小説家といってもよく、名前を知らないという学生はいない。とはいえ、小説を読んだ経験があるという学生は意外に少なく、尋ねてみると数人である。村上春樹を取り上げるにあたっては、エルサレム賞受賞時のスピーチを始めに紹介した。小説には難解なイメージがあるようなので、平易な言葉で語られたスピーチのメッセージに耳を傾けることで、まずはそのイメージを払拭することから始めた。また、村上春樹小説世界には独自のリアリズムがある。ファンタジー小説のように端から非現実的な世界が提示されるわけではなく、現実的な世界観の中に非現実的な要素が滑り込むようにして混入してくる。数年間村上春樹作品を教材として扱ってきた中で、その点に違和感を覚える学生が少なくないように感じていた。そこでこの授業では、番外編として「皆さんの不思議な体験」を語り合うことにした。レポートの一環として、受講者それぞれがこれまでに体験した「不思議な話」を書かせ、授業で紹介した。このレポートについてはどうしても書けない学生がいると思われたため、選択式とし、不思議な体験話を語れる学生のみそのテーマで書くように指示した。そのような体験を持ち合わせていないという学生には、授業で講読した小説についての解釈を課題として与えたが、結果的に約半数の学生が「不思議な体験」を語ってくれた。内容は、幽霊を見たと言う話や虫の知らせを受け取ったという話、よくわからないが不気味な話など様々だったが、提出された全ての体験を受講生に紹介した。

全十回のレポート紹介の中で、この回が学生の反応は最もよかった。レポートの一例を以下に示す。

・中学生のころよく分からないものを見た。夜遅くまである塾が終わり、家に帰ろうとしたときの出来事で、早く帰りたいと自転車で猛スピードで帰ってる途中、道の先に小さいブラックホールのようなものを見た。まっくろくろすけの大きいバージョンで、電灯の点いてない暗闇の田舎道でもはっきりと見えるものであった。私はとても気になって恐る恐る近づいたのだが残念ながらそのまっくろくろすけは暗闇に紛れるようにスッと消えてしまった。後にも先にもこのような現実での非常識な体験は無く、とても印象に残っている。普通、このような不思議な体験は虫の知らせであると考えていたが、このまっくろくろすけは何のメッセージも発してくれず未だに戸惑うばかりだ。もしかしたら瞬間的なメッセージではなく人生単位でのメッセージかも知れないので、この出会いがもたらした意味を時々にも考えていこうと思っている。

このように見てみると、学生が体験した話は現実そのものでありつつ、そこに不可思議な現象が書き加えられることで、そのリアリティが微妙に変容している。これは村上春樹の文学世界そのものなのではないだろうか。現実というものを全て合理的に認識できるという傲慢さこそが近代小説が抱えてきた一つの病理なのではないかと言う提言も含めて、村上春樹小説世界のリアリズムのあり方が、実は我々の現実認識とそうかけ離れたものではないと考えることもできるという解説を施した。

3.7 授業のまとめ—少年A『絶歌』について

授業を実施していた平成27年の6月、神戸連続児童殺傷事件の加害者である「元少年A」によって、犯行へと至った自己の境遇や心理をつづった手記『絶歌』⁽⁸⁾が出版された。すぐに騒動になり、特に出版への批判や反感を含む言論が多く取沙汰されていた。この出版の騒動について、授業で取り上げてきた論点全てと関わっていると感じたため、まとめに代えて解説することにした。まずは事件の詳細の整理と、『絶歌』出版騒動のあらましを概観し、NHKクローズアップ現代の『絶歌』特集「“元少年A” 手記出版の波紋」（7月2日放送）をプロジェクトを使って視聴し、出版についてどう考えるかプリントを使用して記述させた。手記の一部をコピー資料として配布・講読し、数人で意見交換をさせたあと、以下のように、論点別に『絶歌』との関わりを指摘した。

(1)「文学」とは何か

この作品は文学なのか、手記は文学なのか、という疑問が、「ジャンル」の問題と大きく関わる。また、授業で俯瞰した実作者による文学の定義に照らし合わせてみることもできる。授業の導入の際に紹介した作家による「文学」の定義で、村上龍は「小説というのは、基本的にマイノリティを代弁するものだ。社会に受け入れられない人々の声に

ならない声を翻訳して、人間の精神の自由と社会の公正さを訴える、それが文学である」と語っていた。命を奪うことと性的愉楽が分ちがたく結びついてしまい、14歳で2人の児童を殺すに至った「少年A」はマイノリティではないか。社会に受け入れられない人々の一側面なのではないのか。それを「小説」に翻訳するという手間を省いて、「手記」にしてしまったことが問題なのかもしれない。村上春樹は、「一見整合的に見える言葉や論理に従って、うまく現実の一部を排除できたと思っても、その排除された現実には、必ずどこかで待ち伏せしてあなたに復讐する」⁽⁹⁾と言っていた。「絶歌」を買わない・読まないという態度を決めることは、現実の一部を都合よく排除することにならないか。高橋源一郎は、「文学」の手ざわりと、重度心身障碍児のまなざしが似ている⁽¹⁰⁾と言っていた。想像を絶する障壁を携えて、それでもなお生きようとする強さが文学の核心であるならば、「少年A」の社会復帰はそれにはあてはまらないか。太宰は、『惜別』において「誰にも目撃せられていない人生の片隅に於いて行われている事実こそ、高貴な宝玉が光っている」と言った。加害者の心象は、それこそ加害者にしか目撃されていないのではないのか。

(2)「解釈」とはなにか？

『絶歌』批判によく見られる言説に「反省が足りない」「贖罪の意識がない」というのがある。そこでは出版に踏み切るとあたって「元少年A」が被害者遺族を無視したことや、印税の行方が不明瞭な点などが根拠とされている。トトロ＝死神論争の際に、受容者による作品への「解釈」と、作者による作品への「言及」は質が違うことを確認した。作者による「言及」には作者の「行動」を含めてもよいだろう。また、『絶歌』を素直に解釈する限り、「元少年A」は地獄を抱え、地獄を生きている。それは贖罪の意識にあてはまらないのだろうか。そのように「作品」として『絶歌』は読まれてはいけなのだろうか。

(3)「作者・読者」とはなにか？

テキスト論では、作品と作者を切り離して考える。あるいは受容理論によると、作品は「読者が想定する作者」を焦点として、読者の中に収束する。『絶歌』の著者は「元少年A」である。著作の内に実人物の写真も挟み込まれる。我々がかつて日本を震撼させたあの事件を先行知識として、『絶歌』を読む。しかしそれらも全て読者の内にある「虚焦点」でしかなく、現実起こった「酒鬼薔薇事件」とは直接関係していない。フィクションにしる、ノンフィクションにしる、現実起こった出来事かどうかということは、検証しようがないし、しても無意味なのではないか。そもそも、現実とは何なのだろうか。それを考える際には村上春樹作品におけるリアリズムの問題が関係してくるだろう。例えば、三島由紀夫の『金閣寺』について、実際に金閣焼失の事件が起きていなかったら、あるいは漱石の『こころ』について、「先生」や「K」が実在していたということが仮に明らかになったら、その感動の質は変化するのだろうか。

(4)「太宰・三島・春樹」の影響

『絶歌』には、授業で取り上げたこの3人の作家について語られる場面がある。(『金閣寺』は特に熱心に読んだと記してある) 彼らの作品との関連性・影響関係・時代を経て継承されているモチーフがあるのかもしれない。あるとすれば、果たしてそれはどのようなものなのだろうか。

以上のように、授業でふれた論点が、今我々が直面している問題について考える上でヒントになる可能性があるということを説明し、授業全体のまとめとした。

4. アンケートによる学生の授業評価

これまで述べたように、いくつかの工夫を盛り込みながら授業を展開した結果、学生から以下のような反応が得られた。以下は、授業終了後に学生に記述してもらったアンケートからの抜粋である。

(1)授業冒頭でのレポート紹介について

- ・「解釈」とは何か？の授業で周りの人と話し合い、それぞれの「解釈」を発表するというものが、「解釈」そのものを考える刺激になって、その後の課題や現在の社会問題を考えるときに役に立っていると思う。
- ・他の人の解釈などとても面白くて、授業の最初に配られる「みなさんの意見」が一番楽しかったです。
- ・授業の最初みんなの意見が面白かった。同じ作品でも、全く違う解釈だったり、自分と同じような解釈だったりして、一つの作品でここまで多くの解釈ができるのかと毎回感心しながら聞いていた。自分ではあまりよく理解できなかった作品も、人の解釈を聞いて、なるほどこんな考え方があるのか。と作品を違う目線から見ることができた。
- ・授業では最初にみんなのレポートを読むのがちょっと冗長な感じがしました。みんなの意見を知ることができるのは面白いのですが、音読するのはちょっと時間がかかりすぎている気がしました。もう少し読む量を減らすとか、配るだけにするとか、配って簡単に意見のまとめを言っていただけたらすると個人的には嬉しいです。

このように、レポート紹介は多角的にものごとを考える視点の持ちかたを示唆することで、学生にとって良い刺激になったようである。しかし、冗長に感じる学生もいるようで、取り上げる数や紹介の仕方など、まだ工夫の余地がありそうだ。

(2)様々なトピックからのアプローチについて

- ・トトロなども取り上げて頂いたので楽しい授業になりました。難しい文章ばかり読むつらい授業かと思っていましたが、いろいろな工夫がされていたとても楽しい授業でした。
- ・「絶歌」や「三島由紀夫の事件」等、目を背けたくなるような内容も扱っていて、多くの衝撃を受けました。
- ・今までの国語とは違い、トトロ死神説への解釈や最

近話題である『絶歌』について取り上げるなど興味を引き付けていただいたことは良かったと思う。また、動画を用いて作者への関心を深められたことも良かった。

- ・メロスの件など、中学生の検証結果を配布されたのがとても興味深く面白かったです。
- ・最初の方ではトトロみたいな誰でも知っているような作品を途中で挟んでいてとても楽しかったですが、後半では知らな過ぎるひとの作品ばかりで少々しんどいところがあったと思います。

文学作品講読への入り口として、文学以外の話題から学生の興味をひきつけようと様々なトピックを取り上げたが、これについては概ね好評だったようである。しかし作家によっては作品自体が難しく、実際に小説を読む段階にいたって頓挫してしまった学生も少なからずいたようである。

(3)その他授業全般について

- ・この講義で本を読んで自分の考えたことを言葉にする難しさと、それができたときの楽しさを学びました。普段は本を読んでも、面白かった、感動したなどと曖昧な感想しか浮かんできませんでした。どの場面でもなふう感じたから面白かったなどと自分の文章にすることが最初は難しく大変でしたが、感じたことが文章にできたときが一番楽しかったです。多くの作品に触れて、今まで手を出していない分野にも興味を持つようになり、シェイクスピアのマクベスに挑戦しています。
- ・全体としての感想としては有名な作家の作品を知ったり、また読むことができ、良かったと思います。ただ、個人的にはもっと多くの作品を読んでみたいと思いました。これについては時間的な問題があるので個人的にせざるを得ないのでいいのですが、課題の作品の中に授業で読み切れず、自分で読んでおくことがしばしばあったと思います。途中で読むのを止めると次読むときに内容を忘れていたり、どこまで読んだのか忘れたりして、もう一度はじめて読み直すことになります。これでは授業中に読む意味が少し薄れている気がします。
- ・皆の不思議な話を聞いたのは面白かったし、不思議な話をまとめるのも、なんだか物語を書いているようで楽しかったです。物語を書くという課題があったら、もしかしたら面白いのかもしれない。

学生によっては、レポート課題を通して書くこと自体に対する面白さを発見できたり、発展的に読書の機会を持つことができていたりしているようだ。しかし、授業で扱う作品数が少ないことを物足りなく感じたり、購読の仕方が不十分だと感じたりもしているようなので、授業の進め方全般についても改善の余地がある。また、「不思議な話」を書かせたように、課題の一環として短編小説を書くという取り組みもおもしろいかもしれない。

(4) 取り上げる作家について

・今まで知らなかった現代文学について学べてよかったと思う。太宰治や、村上春樹、三島由紀夫など、名前は聞いたことはあるけどどんな本を書いているのかわからないし、小難しい本なんじゃないかと思っていた。しかし、その作者の生い立ちなどから学ぶことによって、こんな人生を歩んだ人が書いた文章ってどんなものなんだろうと自然に読んでみようという気になった。

・授業を通して太宰治を学び、なんて変な人なんだ。どんな性格をしていたんだろう。と、その人自身にすごく興味をもちました。それからすぐに人間失格とヴィヨンの妻のDVDを借りて見ると、原作を読んでみたいという気持ちになりました。今日はピースの又吉が芥川賞とったみたいなので早速火花を買いました。今から読もうと思います。初めて本を読むことに興味が持てて、自分でもびっくりしました。

・一番楽しんで読めた作者は、太宰治で、太宰の言い回しは現代に生きる我々が扱うものに近いため、読みやすく内容を素直に取り込むことができた。逆につまらなくはなかったが難解であると感じた作者は、三島由紀夫と村上春樹です。三島由紀夫は、現代離れた言い回しと作中における作者の意図が明確でないところに難しさを感じた。また、村上春樹は、現実離れた世界観という部分は好きになれるが、現実と結び付けているコミットメントな作品は共感しがたいため、現実と切り離されているデタッチメントな作品から読んでいこうと思った。

・最後の授業で取り上げられた「絶歌」にとっても興味を持ったので、今後、自分でも読んでみようと思います。

・授業で触れたお気に入りの作家は太宰治と三島由紀夫です。私は本は好きでしたが、読書の機会をあまりとってきませんでした。授業で二人の作家に触れた後から、本に関心を持ち図書室へ足を運ぶことが増えました。太宰治の作品の中でも気に入ったのが、テストの問題に出てきた「黄金風景」でした。人間の激しい感情の動きやそれを必死に隠そうとする描写が、最後まで余韻を残していてとても好きでした。一方の三島由紀夫を面白いと感じたのは、太宰を嫌いなながらも似た余韻があったからです。

・一番面白かったのは「太宰治」の作品でした。今まで難しいと思っていたので、授業を受けてから考え方が変わりました。それと、先生が太宰治の話をするときにとても熱くなっていたので完全に太宰ワールドに魅了されました。「村上春樹」の作品は理解するのが難しかったです。

・三島さんの文章は綺麗だったけど難しかったです。とても有名な方でしたが村上春樹さんののはあまり好きな作風ではなかったかなと思いました。

・ピース又吉が芥川賞を受賞しましたね。日本現代文学で又吉さんが太宰治を敬愛していること、そして太宰治が芥川を敬愛していることを知っていたので、なんだかとっても面白かったです。来年の現代文学でまた太宰治を取り扱うならば、ついでに火花を読むのでもいいかもしれません。太宰治は読みやすく、また話も面白く個人的に好みでした。ただ三島由紀夫は、少し私の日本語力が足りない為に読んでいて頭が痛くなりました。

・一番面白かった作品は、村上春樹の「かえるくん、地球を救う」で、文章が分かりやすく、みんなの解釈も面白かった。三島由紀夫の作品は、文章は美しかったが内容が難しく、私には向いていないかなと思った。

・私個人としては、現代文学というのならいっそのこと突っ切って世間一般ではライトノベルと分類されるものを扱っていても面白かったような気がする。先生が今回現代文学として取り上げたものは過去には大衆娯楽だったものと認識している。だったら、今大衆娯楽として広く分布しているライトノベルも現代文学として扱ってよかったのではないのだろうか？

取り上げた作家の中では太宰治が最も好評だったようである。逆に三島由紀夫は、文体の美しさは大いに感じ取ってもらえたようだが、内容が難解でなじみにくかったようだ。村上春樹は同時代の作家であるにも関わらず、好き嫌いが分かれた。作家の紹介や文学以外のトピックを用いての紹介がうまくいっても、作品自体に魅力を感じてもらえなければ興味を持ってもらえないようである。作家の好みについては、取り上げる作品に左右される部分も大きいと思われるため、学生の反応を見ながら、よりよい作品を探して行きたい。また、授業で紹介した又吉直樹や少年Aに興味を持った学生も見られた。それをきっかけとして、様々な文学作品にふれてもらえればと願う。その他の意見として、ライトノベルを扱って見たらどうかという提案もあるため、大衆文学にも目を向け、授業に取り入れることができれば、もっと多くの学生の関心を集められるかもしれない。

5. まとめと今後の課題

学生に文学に関心を持ってもらうため、様々なトピックを入口として作品を講読してきたが、ある程度の効果は見られたようである。また、レポートの執筆や授業での紹介・授業中に行った作業や受講者同士のやりとりを通して、主体的な学びの促しも部分的には達成できたように思う。

今後の課題は、トピックにいくら関心を持って作品自体に魅力を感じてもらえなければ意味がないので、作品を厳選することと、より効果的な主体的学びを促すように、授業の組み立てをさらに改善することである。

（平成 27 年 9 月 25 日受付）

（平成 27 年 11 月 25 日受理）

参考文献

- (1) 大橋洋一：『新文学入門 T・イーグルトン『文学とは何か』を読む』岩波書店 pp.44-45(1995年8月).
- (2) 村上龍：『櫻の木の下には瓦礫が埋まっている。』ベストセラーズ pp.141-142(2012年5月).
- (3) 清水正：『宮崎駿を読む 母性とカオスのファンタジー』鳥影社(2001年12月).
- (4) 黒崎政男：『哲学者はアンドロイドの夢を見たか—人工知能の哲学』哲学書房(1987年10月).
- (5) 又吉直樹：『火花』文藝春秋(2015年3月).
- (6) 又吉直樹：『第2図書係補佐』幻冬舎 pp.148-150(2011年11月).
- (7) 荒戸源次郎監督：『人間失格』ポニーキャニオン(2010年8月).
- (8) 元少年A：『絶歌』太田出版(2015年6月).
- (9) 村上春樹：『村上春樹全作品 1990～2000⑦約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いにいく』講談社 pp.241-242(2003年11月).
- (10) 高橋源一郎：『101年目の孤独——希望の場所を求めて』岩波書店 pp.167-168(2013年12月).